

## 12. 遊離空腸移植による口腔底再建術の経験

小村 健, 武宮三三, 嶋田文之, 大原奎昊  
(千葉県がんセンター・頭頸科)

口腔底癌 (T<sub>2</sub> N<sub>1</sub>) 症例に対す pull-through ope. 後、遊離空腸の patch graft による口腔底部再建術を行なった。graft の flexibility, cicatricial induration のない点等、残存する口腔機能への障害は軽微であり、口腔内再建には有用と考えられた。

## 13. 2年間経過後急速に増大癌化した舌腫瘍の1例

北原美奈子, 鈴木好之, 今井香樹,  
木村 孝雪 (千大)

患者は57歳男性。初診時、左舌縁部に12×10mm 大の腫瘍を認め、乳頭腫と診断、生検をかねて腫瘍の摘出予定だったが、来院せず、2年間放置の状態だった。再来時腫瘍は40×36mm に増大。生検にて扁平上皮癌と診断。左舌半側切除、左顎部廓清術、D-P 皮弁による即時再建術を施行。乳頭腫の癌化については、種々の議論があるが、今回の経験からは、悪性腫瘍に準じた取り扱いが、必要と思われる。

## 14. 当科における PM-MC Flap 再建例の検討

小林 操, 池羽ゆかり, 市川恵子,  
北原美奈子 (千大)

当科にて口腔悪性腫瘍切除後、PM-MC Flap による再建が11例経験された。原疾患は、舌癌7例、口腔底癌2例、下顎歯肉癌1例、その他1例であった。術後の合併症としては Total flap necrosis が1例、Partial flap necrosis が3例、Suture line separation が4例、合併症のないものが2例であった。発語明瞭度は、舌垂全摘者では38%、舌半側切除者では40~58.5%で嚥下障害の重度が2例、中等度が2例、軽度が4例と、8例中に機能障害が認められた。

## 15. 舌癌治療成績における needling と手術療法の差の検討

詹 前澤, 林 逸子, 今井 裕 (千大)

我々は当科における過去12年間の舌癌症例36例について、治療と予後特に外科治療と組織内照射との相異について検討した。その結果、外科治療は組織内照射に比べ生存率ならび局所制御で優れていた。これは外科治療群の平均年齢が5歳低いこと、又、外科治療群に T<sub>1</sub> 症例が多かったのに対し、組織内照射群では T<sub>2</sub> 症例が多く見られたことによると思われた。また、組織内照射

は長期経過後に再発する傾向があり、長期に渡る慎重な経過観察の必要があると思われた。

## 16. 口腔扁平上皮癌の病理組織像と予後について

馬橋敏紀, 詹 前澤, 桑野恵己,  
高原正明 (千大)

今回我々は、昭和48年1月より昭和55年12月までの8年間に当科で加療した舌癌新鮮例31例について、臨床病理学的所見と予後との関係を比較検討した。その結果、1. T及び Stage が進む程予後不良であった。2. 低角化、細胞異形度高度のものは予後不良であるが、核分裂像との関係は一定の傾向は認められなかった。3. 分化の良いもの程、間質細胞浸潤が多い程予後良好であった。4. 腫瘍浸潤様式4型群は極めて予後不良であった。

## 17. 舌下腺から発生したと思われる腺様嚢胞癌の1例

土屋晴仁, 岡本恒一郎, 桑野恵己,  
馬橋敏紀, 高原正明 (千大)

右舌下腺に原発した腺様嚢胞癌を経過したので報告する。症例は50歳、女性。初診までの経過は2年9カ月で、右口腔底の無痛性腫瘍を主訴として来科。腫瘍は15×7mm で左右領域リンパ節は触知し得ず、遠隔転移も認めなかった。手術は全麻下に右上顎部廓清後、5~7部舌側下顎皮質骨、舌神経を含めた腫瘍摘出術施行。摘出腫瘍は20×15×15mm で病理組織学的には、節状型、管状型、充実型が混在していた。術後1年4カ月現在、経過良好である。

## 18. 純アルコール腫瘍内投与法により著しく縮小した血管腫の1例

京田直人, 金 福栄, 市川恵子,  
甲原玄秋 (千大)

我々は上口唇に生じた大きな動脈性血管腫に対し、純アルコール腫瘍内投与により著明な腫瘍の縮小をみた。初回、7cc の注入により大きさに著変はなかったが、口唇左半側の拍動は消失した。5カ月後、2回目、8cc を注入。腫瘍は漸次縮小し、術後約5カ月で形態は審美的にほぼ満足のいく状態にまで改善され、拍動も消失した。アルコールは適正な範囲内で用いれば、入手、取り扱い、安価という点で有用な塞栓形成物質と考えられた。